

日本禪林における中國の杜詩注釋書受容

——『集千家註分類杜工部詩』から『集千家註批點杜工部詩集』へ——

太田 亨

はじめに

我が國において本格的に杜詩を考證の對象にしたのは五山の禪僧達である。彼らが杜詩研究に没頭していた證據は、室町時代の嘉吉年間（一四四一〜一四四四）頃、江西龍派（一三七五〜一四四六）が抄したとされる『杜詩續翠抄』（以下『續翠抄』と略稱。底本、卷一と卷二は國立國會圖書館藏、卷三〜卷十九は建仁寺兩足院藏。全二十卷、卷十八の一部と卷二十缺）、室町時代末期頃、雪嶺永瑾（一四四七〜一五三七）が抄したとされる『杜詩抄』（底本、兩足院所藏。全二十五卷、卷三の一部と卷十七缺。）を見れば一目瞭然である。二書を通覽して氣付く特徴の一つは、禪僧達がテキストに用いていた中國の杜詩注釋書が『集千家註批點杜工部詩集』（以下『批點本』と略稱）だということである。『批點本』は劉辰翁が評點し、高楚芳が編したものである。この書が禪林に流布していたことは、天隱龍澤（一四二二〜一五〇〇）が『默雲稿』の中で「獨心華臆斷與劉氏評點、盛行于世。」（獨り『心華臆斷』と劉氏評點とのみ、世に盛行す。）と述べていることからも證される。ところで從來、上記の資料によって、中世禪林を通じて支持された注釋書は『批點本』であると考えられがちであった。

しかし、取り上げられた資料は、いずれも中世禪林を區分した時期で言えば、中期（南北朝時代末期〜應仁の亂頃）と後期（應仁の亂頃〜室町時代末期）のものである。

筆者が、初期（鎌倉時代末期〜南北朝時代末期）における禪僧の杜甫に關する資料を考察したところ、虎關師鍊（一二七七〜一三四六）や中巖圓月（一二〇〇〜一三七五）といった当期を代表する禪僧は、『集千家註分類杜工部詩』（以下『分類本』と略稱）をテキストに用いていたことが明らかになった。『分類本』は黃希・黃鶴父子が補注し、徐居仁が編したものである。この書が初期の禪僧に重視されていたことを示す顯著な例を示せば、虎關は『濟北集』卷十一「詩話」の中で、「己上人茅齋」詩について「註者曰、歐陽修云、僧齊已也。古本系開元二十九年。新本系天寶十二載。皆非也。」（註者曰く、「歐陽修云ふ、『僧の齊已なり。』と。古本は開元二十九年に系く。新本は天寶十二載に系く。」と。皆非なり。）と注解し、「註者、つまり『分類本』の黃鶴註を考證し否定している。同様に「贊上人に別る」詩についても「諸註皆非。只希曰、引梵網經注上句楊枝、不及下句豆子。蓋此豆非青豆也。澡豆也。」（諸註は皆非なり。只だ希曰ふに、『梵網經』を引きて上句の楊枝に注するも、下句の豆子に及ばず、と。蓋し此の豆は

青豆に非ざるなり。澡豆なり。」と、『分類本』の黄希註を考證している。また中巖も『藤陰瑣細集』の中で、杜甫の死没時期を考證するに際し、『分類本』に掲載される李觀の「遺補杜子美傳」と韓愈の「題子美墳」詩を引用している。

以上を踏まえると、日本禪林においては、初期では『分類本』が重視されているのに對し、中期と後期では『批點本』が重視されたようである。本稿では禪僧達が『分類本』から『批點本』を重視するようになったという事實を踏まえた上で、中國及び中國禪林における杜詩注釋書の流布・普及の様相、二書の日本への傳來の様相、日本における傳播の様相について明らかにする。そしてそれらの様相をもたらしたる理由について考察し、日本禪林における杜詩受容に關する基礎的研究の一端として示したい。

一、中國における杜詩研究

『批點本』が中國から日本に傳來したことに關して、その原因を探っていくと、景徐周麟（一四四〇～一五二八）が記した「續臆斷序」〔翰林葫蘆集〕所收〕に次のように書かれている。

嘗聞、一老宿講此集、曰、元末明初、方外畦衣之翫杜詩者、俊用章泐季潭在焉。潭祖批點、章好千家。

嘗て聞く、一老宿の此の集を講じて、曰く、「元末明初、方外畦衣の杜詩を翫する者、俊用章・泐季潭在り。潭は『批點』を祖とし、章は『千家』を好む。」と。

元末明初の中國禪林における杜詩研究の一端を記述している。中國禪林では用章廷俊（一二九九～一三六八）と季潭宗泐（一三一八～一三九一）が杜詩に造詣が深く、用章は『千家』、つまり『分類本』を好

み、季潭は『批點』、つまり『批點本』を祖としている。當期の中國禪林では、『分類本』を支持する僧と『批點本』を支持する僧が混在していたようである。

『續翠抄』には注解のみではなく、禪林における杜詩受容の様相なども記されている。例えば「晚出左掖」〔續翠抄〕卷四〕詩項には次のような指摘が存する。（句讀點は筆者の判斷による。その他は全て原文通り。以下同じ。）

季潭荷擔批點、俊用章荷擔千家。季潭用章、共雖爲訖笑隱弟子、相異也。大年所取洙注也。勝定國師用批語也。今唐土天童前住講杜儒者多。聽之詩與經不二也。

季潭は『批點』を荷擔し、俊用章は『千家』を荷擔す。季潭と用章は、共に訖笑隱の弟子爲りと雖も、相異なるなり。大年の取る所は洙注なり。勝定國師は批語を用ふるなり。今唐土の天童の前住杜を講ずる儒者多し。之を聽けば詩と經とは二ならざるなり。

ここでも中國において『批點本』を支持していた禪僧が季潭宗泐であり、一方の『分類本』を支持していた禪僧が用章廷俊であったことを指摘する。そして季潭と用章が共に笑隱大訖（一二八四～一三四四）に従學し、笑隱より法を嗣いだことを示している。二人は同じ門派に屬しながら、杜詩に關しては異なる注釋書をテキストに用いていたことが分かる。注目すべきは、日本禪僧の大年祥登（？～一四〇八）が『分類本』の王洙の註を取り、「勝定國師」、つまり絶海中津（一三三六～一四〇四）が『批點本』の批語を採用していたということである。両者は共に中國に渡っており、大年が用章に、絶海が季潭に杜詩を學んだことが推測される。

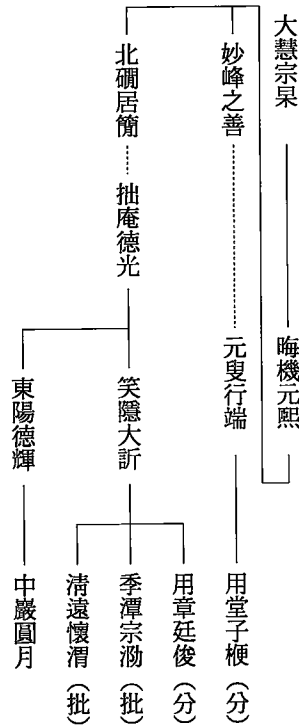
さらに「雨不絶」〔續翠抄〕卷十六〕詩項には次のようである。

元朝梗^{*}栴堂荷擔千家、渭清遠荷擔批點矣。

元朝の梗用堂は『千家』を荷擔し、渭清遠は『批點』を荷擔す。

*「梗」は「栴」、「栴」は「用」か。

元朝において用堂子梗（生没年不詳）が『分類本』を支持し、清遠懷渭（一二一七〜一二七五）が『批點本』を支持していたことが判明する。用堂は元叟行端（一二五五〜一三四一）より法を嗣ぎ、清遠は笑隱大訶より法を嗣いでおり、共に同じ大慧派に屬する。その法系を圖示すると、次のようになる。



* 點線は二世代間の省略を意味する

大慧派の笑隱大訶の門下では杜詩研究が盛んであり、多くの日本禪僧がその下に從學したが、講義する禪僧によって異なる杜詩注釋書がテキストに用いられていたようである。

今、二書について概説すれば、『分類本』（二十五卷）は、宋の黃希・黃鶴父子が補注を施し、嘉定丙子（一二二六）に作られている。分門別に詩を配列し、それまでの諸注を集大成し、更に父の黃希が訓詁にこだわって注を、子の黃鶴が年譜を辨疑し、作詩年代を明確にしてい

る。一方の『批點本』（二十卷）は、劉辰翁が評點し、高楚芳が編集し、元の大徳七年（一二三〇）に原刻されている。編年形式で詩を配列し、従来の諸注の中で必要のない注を大膽に削り落とし、劉氏の独自の評點が施されている。二書は形式もさることながら、内容においても異なる特徴が多い。かくして、中國禪林ではこの二書を支持する禪僧が混在していたわけである。

當時の中國において、杜詩の注釋書はどのように流布・普及していたのであろうか。

明の胡震亨は『唐音癸籤』卷三十二で次のように指摘している。

杜甫集自唐人樊晃、其後五代孫光憲、宋初鄭文寶、孫僅各有編、今無考。寶元初、翰林王洙原叔始分古體、近體二類、考其歲月以次之。其合古律爲編、始自黃長齋、及吾邑魯冷齋先生嘗。嘉泰中、建安蔡夢弼、據冷齋本爲會箋、歲月可疑者、明著其莫可考、附卷後。嘉定中、臨川黃鶴父子始取分體舊本、於題下確定其歲月、猶未敢便更其次也。元大徳中、廬陵高楚芳者、劉辰翁門下士、則直據黃氏、並其次盡易之、居然不疑。今行世本是也。

杜甫集 唐人の樊晃より、其の後 五代の孫光憲、宋初の鄭文寶、孫僅 各々編する有るも、今考ふる無し。寶元初、翰林王洙原叔始めて古體、近體の二類に分ち、其の歲月を考へて以て之を次す。其の古律を合して編と爲すは、黃長齋より始まり、吾が邑の魯冷齋先生嘗に及ぶ。嘉泰中、建安の蔡夢弼は、冷齋本に據りて會箋を爲し、歲月の疑ふべき者は、其の考ふべき莫きを明らかに著し、卷後に附す。嘉定中、臨川の黃鶴父子は始めて分體の舊本を取り、題下に於いて其の歲月を確定するも、猶ほ未だ敢へて便ち其の次を更めざるなり。元の大徳中、廬陵の高楚芳は、劉辰翁の門下の士にして、則

ち直ちに黄氏に據り、其の次を並せて盡く之を易へ、居然として疑はず。今世に行はるる本是れなり。

主として編年を考證した杜詩注釋書の變遷が示されている。唐代より樊晃、孫光憲、鄭文寶、孫僅等が杜詩集を編集しているが、散佚しているため詳細は分らないとある。寶元の頃（一〇三九頃）、王洙によって『杜工部集』が撰され、始めて杜詩を古體と近體に分類し、且つ製作時期を考慮して配したとある。詩體によって分類されていた杜詩は、魯峯の『編次杜工部集』中に全て製作年代順に配され、以後、嘉泰中（一一〇一〜一一〇四）、建安の蔡夢弼の『草堂詩箋』によってその年次を更に詳しく考證される。嘉定中、黄希・黄鶴父子が『黄氏補注杜詩』を撰し、分體の形式を取り、詩題の下に其の製作年次を確定し、從來の成果を一層深く吟味した。ここで特記すべきことは『黄氏補注杜詩』が、同じく嘉定九年（一一一六）、『分類本』として再編されていることである。そして元の大徳中（一二九七〜一三〇八）、劉辰翁の門下である廬陵の高楚芳が、『集千家註批點杜工部詩集』を編し、黄鶴の意見を參照し、編年形式の書を集成したのである。その『批點本』こそ、胡震亨が活躍した明末に最も流行していた書なのである。

このように中國において、宋末元初には斬新な書として『分類本』が主流であったようである。それが大徳七年（一二三三）に『批點本』が出現すると、多くの文人が『分類本』から『批點本』を支持するようになり、明の半ばになると『批點本』が主流になるのである。元末から明初は丁度二書の評價の轉換期に當たり、その影響が中國禪林にも及んだと考えられよう。

二、「分類本」の繼承

二書をそれぞれ支持する中國禪僧が存していたことが明らかになつたわけであるが、まず『分類本』の日本傳來と流布について考察する。『分類本』の註解は、中國禪林でそれを支持していた用章廷俊と用堂子楨より、どのように本朝禪林に傳わたつたのであろうか。

「次晚洲」〔杜詩抄〕卷十九 詩項に「大年便用堂傳也。」（大年は便用堂に傳へらるるなり。）とあり、用堂より日本僧の大年祥登に杜詩注解が傳授されたことが明らかになる。また「自京赴奉先縣詠懷五百字」〔續翠抄〕卷二 詩項に、「俊用章說、大念傳之。」（俊用章の說を、大年之を傳ふ。）とあるように、大年は用章にも學んだことが判明する。

大年祥登は『日本名僧傳』に、「登大年、禪林僧。與俊伯英入唐、習杜詩。」（登大年は、禪林の僧なり。俊伯英と唐に入り、杜詩を習ふ。）とあり、伯英徳俊（？）一四〇三）と共に中國に渡り、杜詩を學んでいる。

伯英徳俊について、『續翠抄』卷八「絕句四首其三」に次のようである。

或云、伯英未住天龍爲西堂時、勝定問此句。英曰、好問也。悟道得法モ當如此ト云、長講之云々。（略）伯英問之俊用章者也。

或いは云ふ、伯英未だ天龍に住さず西堂爲りし時、勝定此の句を問ふ。英曰く、好き問ひなり、と。悟道得法も當に此の如かるべしと云ひ、長く之を講ず云々。（略）伯英之を俊用章なる者に問ふなり。

絶海中津が伯英に質問し、伯英はその詩句に悟道得法が含まれている

と答えている。そしてその解釋は中國に渡った時、用章廷俊より聞いたものであると言ふ。伯英も中國で得た『分類本』に關する知見を日本禪林に披露していたようである。

大年祥登と伯英徳俊は、中國において用章廷俊と用堂子楨の『分類本』による杜詩解釋を傳承され、日本へそれを持ち歸る。二人は日本禪林において、『分類本』による注解を傳播したようである。『續翠抄』卷十四「課伐木序」には次のようにある。

此ヲ大年義有別。大年ハ講杜三百度。其義ニハ乎字ハ置字也。

(中略) 江西杜本其時點之坊主本也。從伯英之說者也。然伯英爲大年同宿、何其說有異哉。

此を大年の義に別有り。大年は杜を講ずること三百度なり。其の義には乎の字は置字なり。(中略) 江西杜本に其の時之を點するは坊主の本なり。伯英の説に従ふ者なり。然れども伯英は大年の同宿爲れば、何ぞ其の説異なる有らんや。

大年は三百回もの杜詩講義を行ったと記されており、『分類本』の注解を禪林に廣めたことが明らかである。そして江西は伯英の説に従い、注釋書に點するにあたり、伯英と大年が同宿であるため、兩者の説が異なることがないとしている。大年も伯英も用章廷俊より杜詩を學び、同じ解釋が多かったことが推測される。兩者は共に禪林を代表する杜詩研究者であつたようである。

大年については、『續翠抄』卷十九「次晚洲」詩項に「大年ハ千家傳也。」(大年は『千家』に傳へらるるなり。)とあるのを始め、卷十一「寄董卿嘉榮十韻」や卷十九「憶昔行」に『分類本』を講義した痕跡が見られる他、『續翠抄』中にその解釋が頻繁に引用されている。また他の禪僧についても、卷十三「八哀詩」に、太清宗涓(一三二一

一三九一)や大陽□伊(人物不詳)が『分類本』を講義していたことが掲載されている。

以上のように、『分類本』は中國禪林より日本に傳來し、日本において傳播したが、太清・大年・伯英以後、禪僧の中で『分類本』を支持した禪僧の記録が残っていない。代わりに目立つのが、『批點本』を支持する記述である。『批點本』は中國からどのように日本に傳わり、禪林に廣まったのであろうか。

三、『批點本』の繼承

中國禪林において、『批點本』は季潭宗泐と清遠懷涓によって支持されていた。「次晚洲」(『續翠抄』卷十九)詩項に次のようにある。

勝定渭清遠季潭傳也。心華尊西堂傳也。

勝定は渭清遠・季潭に傳へらるるなり。心華は尊西堂に傳へらるるなり。

「勝定」、つまり絶海中津が中國へ渡り、清遠と季潭より杜詩を學んだことが分かる。

絶海と季潭の關係について、「奉陪鄭駙馬章曲二首」(『續翠抄』卷四)詩項にも次のような指摘がある。

太白傳勝定、勝定傳季潭也。

太白は勝定に傳へられ、勝定は季潭に傳へらるるなり。

これによると杜詩解釋は、季潭より絶海に傳えられ、絶海より太白眞玄(？)(一四一五)に傳えられたことが明らかになる。絶海は應安元年(一三六八)、汝霖妙佐・如心中恕と共に入明し、中竺寺の季潭宗泐に參じ、靈隱寺・徑山寺を遍歴している。その際に杜詩に關しても季潭より多大な影響を受けたことが推測される。

また絶海と清遠については、「遊龍門奉先寺」(『續翠抄』卷一)詩の句「已從招提遊、更宿招提境。」(已に招提の遊びに従ひ、更に招提の境に宿す。)に次のようにある。

太白云、勝定國師傳、謂清遠之說、言即今已遊此及晚、當^{サレ}飯而更宿也。

太白云ふ、勝定國師は傳へて、清遠の説を謂ひ、言は即ち今已に此に遊びて晚に及び、當に飯るべけれども更に宿るなり、と。

太白眞玄は、絶海が杜詩の二句について、「龍門寺に遊ぶ内に遅くなつてしまひ、歸らなければならぬが、更に宿泊してしまつた」と解釋したことを講じているが、その説は絶海が清遠懷渭より聞いたものであつたとする。

同様の例として、「別贊上人」(『續翠抄』卷六)詩に「勝定説亦依渭清遠義者也。」(勝定の説も亦た渭清遠の義に依る者なり)とあり、「柳司馬至」(『續翠抄』卷十八)詩に「渭清遠勝定ノ義ハ、……」とある。絶海中津は日本で杜詩講義をするに際し、清遠より吸收した杜詩の解釋を披露していたことが分かる。絶海は入明した折に、道場山において清遠懷渭に参じており、そこで杜詩の講説を受けたと思われ^④る。『批點本』の註解に關する解釋や知識は、季潭や清遠を通じて絶海に傳えられたのである。

絶海以外に『批點本』の注解を傳授された禪僧の存在について、「絶句漫興其四」(『續翠抄』卷七)には次のようにある。

此説ツクシノ恕侍者説ナリ。引渭清遠傳授、高宗派ヲツララレトモ、江西曰、吾義可取恕侍者所咲之説而已。

此の説はつくしの恕侍者の説なり。渭清遠より傳授さるるを引き高宗派をつらるれども、江西曰く、吾が義、恕侍者の咲ふ所の説を

日本禪林における中國の杜詩注釋書受容

取るべきのみ、と。

ここで言う「ツクシノ恕侍者」とは如心中恕(生没年不詳)のことであり、彼も清遠懷渭から解釋を傳えられている。如心も絶海と共に明に渡り、彼の地で季潭や清遠に従學している^⑤。絶海や如心を始め、當時中國へ渡り、「批點本」の注解を吸收した禪僧が存したことが判明する。

では絶海が持ち歸つた『批點本』の知識は、以後の禪林において、どのように廣まったのであろうか。「行次昭陵」(『續翠抄』卷一)には次のようにある。

太白和尚云、勝定國師說謂、此謂祿山亂後作也。誤編此所以者何。篇中ノ句往々有謂其亂也。名謂隋亂、實謂祿山亂也。昭陵^宋太宗陵名也。

太白和尚云ふ、勝定國師説きて謂ふに、此れ祿山の亂後の作を謂ふなり。誤りて此に編ずる所以は何ぞや。篇中の句に往々其の亂を謂ふこと有ればなり。名に隋亂を謂ふも、實は祿山の亂を謂ふなり。昭陵は太宗の陵名なり、と。

太白眞玄は、この詩が安祿山の亂の後に配されるべきであると絶海が指摘したことを講じている。杜詩解釋は絶海から太白へ繼承されたことが分かる。

太白眞玄の從學について「奉和賈至舍人早朝大明宮」(『續翠抄』卷四)詩項には次のようにある。

太白和尚杜詩荷擔、始雪溪大年問、而後問勝定國師。
*「雪」は「雲」か。

太白和尚杜詩に荷擔して、始めは雲溪・大年に問ひ、而る後に勝定國師に問ふ。

ここでは太白の經歷が判明する。太白は雲溪支山（一三三〇）一三九一）・大年祥登に參學した後、絶海の下を訪れて杜詩を傳授されている。

『續翠抄』中には、太白と絶海の關係を示す記述が頻繁に見受けられる。「自京赴奉先縣詠懷五百字」〔『續翠抄』卷二〕詩の句「平人固騷屑」（平人は固より騷屑たり）について次のようにある。

騷屑不安貌。此說勝定——太白——傳授之解也。

騷屑は不安なる貌なり。此の説は勝定——より、太白——傳授せらるるの解なり。

「騷屑」は庶民の不安がる様子として解釋し、太白が絶海より傳えられた説とする。

「贈左僕射鄭國公嚴公武」〔『續翠抄』卷十三〕詩の句「壯士血相視」（壯士血相視る）に次のようにある。

太白傳勝定曰、血乃淚也。

太白、勝定より傳へられて曰く、血は乃ち淚なり、と。

血は淚のことであるという解は、太白が絶海より聞いたものであることが分かる。

また「遣興五首其一」〔『續翠抄』卷四〕詩項において、「玄太白傳勝定國師說、甚好。」（玄太白の勝定國師より傳へらるるの説は、甚だ好し。）とあり、絶海より傳えられた太白の解釋を高く評價している。絶海と太白については、他にも例えば「佳人」〔『續翠抄』卷五〕詩項に「太白傳勝定國師云、……」（太白は勝定國師より傳へらると云ふ、……）とあり、「宇文晁尙書之甥崔或司業之孫尙書之子重泛鄭監前湖」〔『續翠抄』卷十八〕詩項に「勝定國師太白和尚相傳云、……」（勝定國師・太白和尚相傳して云ふ、……）とあり、二人の相承關係を示す

資料が頻繁に見受けられる。太白眞玄が絶海中津より聞いた杜詩解釋を、禪林に講抄していたことは明らかである。江西龍派はそれらの講義を興味深く聴き取っていたのであろう。中國より傳わった『批點本』の註解に關する知識は、こうして絶海から太白へ、太白から江西へ傳承されたのである。

大凡、江西龍派は太白より絶海の説を傳えられている。しかし、江西自身も絶海の講義を受けており、『續翠抄』には直接に「勝定國師云」と、太白を介さず、その註解が引用される場合も存する。「李監宅二首」〔『續翠抄』卷一〕詩項には次のようにある。

勝定國師云、此二首轉倒而編、以尙覺之語觀之、則以華館——爲第一首、以尙覺——爲第二首。此義殊勝矣。

勝定國師云ふ、「此二首轉倒して編む。『尙覺』の語を以て之を觀るに、則ち『華館』を以て第一首と爲し、『尙覺』を以て第二首と爲す。」と。此の義、殊勝なり。

ここで江西は、絶海が「李監宅二首」の其の一と其の二の順序が逆であると講じたことを紹介し、殊勝の義であると譽めている。

「送長孫九侍御赴武威判官」〔『續翠抄』卷三〕詩の句「繡衣黃白郎」（繡衣 黃白の郎）には次のようにある。

黃白郎、古今不審。或問勝定國師。答曰、黃白、繡衣也。黃白者綠色也。

黃白郎、古今審かならず。或いは勝定國師に問ふ。答へて曰く、黃白は繡衣なり。黃白は綠色なり、と。

江西は昔から不明であった「黃白郎」について絶海に問うたところ、絶海は、「黃白」は繡衣のことで、色としての綠色であると答えたことを紹介している。

「江畔獨步尋花七首其三」(續翠抄)卷七)詩項には、「勝定國師、面白カル詩也。」(勝定國師の面白かる詩なり。)とあり、「暝」(續翠抄)卷十八)詩の句「欲掩見清姑」(掩はんと欲するとき清姑を見る)には、「勝定面白此見字、不爲聞之故也。(勝定此の見る字を面白しとするは、聞と爲さざるの故なり。)とあり、絶海が高く評價した杜甫の作品、及び詩句を傳えている。また「詠懷古跡五首其三」(續翠抄)卷十五)詩では「勝定國師講之引季潭詩。」(勝定國師之を講ずるに季潭の詩を引く。)と、絶海が、從學の師である季潭宗泐の詩を引用して講義したことを記している。江西はこうした中國の考證法にも興味を持っていたと思われる。

絶海の解釋はこの他にも『續翠抄』に相當數が引用されている。このように中國で絶海が得た『批點本』の註解に關する知識は、直接に江西にも繼承されたことが明らかになる。江西が永和元年(一三七五)に誕生し、絶海が應永十二年(一四〇五)に示寂したことを勘案すれば、江西がいまだ年少の折に、絶海の杜詩講釋を聽講したことになる。このように江西が直接に絶海から聽聞したものも存するであろうが、やはり太白を通じて絶海の解釋を傳え聞いたものの方が遙かに多いであろう。「投贈哥舒開府二十韻」(續翠抄)卷二)詩項には次のようにある。

伊大陽者、心華之同宿。豨是以就大陽於江州舍、親聞其講、而後謁太白。太白說毀心華之解、故請得聞太白之說也。

伊大陽は、心華の同宿たり。豨是を以て大陽に江州の舍に就き、親しく其の講を聞き、而る後に太白に謁す。太白説きて心華の解を毀り、故に請ひて太白の説を聞くを得るなり。
江西は、心華元棟(生没年不詳)と同宿の大陽□伊に杜詩の講義を受

日本禪林における中國の杜詩注釋書受容

け、後に太白に參じている。そして太白が『心華臆斷』を謗ったことに共感し、太白に請願して講義を受けるようになったとある。
太白の講義について「奉陪鄭駙馬章曲二首」(續翠抄)卷四)詩項に次のように言う。

江西云、玄太白常讀杜詩、說皆面白事往々有之。殊更此章曲——、家惱——之句第一面白。(中略)當官問于傳太白之今後世人云々。江西云ふ、玄太白は常に杜詩を讀み、説くこと皆面白き事往々にして之有り。殊更に此の章曲——、家に惱——の句第一に面白し。(中略)當に宜しく太白の今後の世人に傳ふるを問ふべき云々、と。

江西は太白の解釋を重要視し、後の人に傳ふるべきことを説いている。また「贈太子太師汝陽郡王璣」(續翠抄)卷十三)詩項にも「太白如此講面白。」(太白此の如く講ずること面白し。)とあり、江西が太白の講義を高く評價していたことが窺える。本項では省略せざるを得ないが、『續翠抄』中には太白眞玄の解釋が數多く引用されている。

杜詩解釋は、中國僧である季潭宗泐と清遠懷涓から日本僧・絶海中津に傳わった。そして絶海から太白へ、もしくは絶海から江西へ、さらに太白から江西へ傳わったのである。かくして『批點本』の杜詩解釋は、中國から日本に傳來し、如上の經過で後の世に傳播したのである。今『分類本』と『批點本』の繼承關係を圖示すると、次のようになる。

《分類本の繼承》

〈中國〉

用章廷俊

用堂子棟

〈日本〉

大年祥登・伯英德俊(以後、記事欠)

《批點本の繼承》

〈中國〉

季潭宗洵

〈日本〉

太白眞玄

清遠懷涓

絶海中津

江西龍派（以後、盛行）

天隱の『默雲稿』の中には次のようにある。

本朝禪林耆宿、大年心華太白諸大老、口義惟夥。

本朝禪林の耆宿、大年・心華・太白の諸大老、口義惟夥し。

ここでは大年祥登、心華元棟、太白眞玄の杜詩講義が頻繁であったことを特記している。ただし、この中の大年は『分類本』をテキストとし、太白は『批點本』をテキストに用いていたのである。諸本中における『分類本』の繼承者に關する記事は大年以後見られないが、『批點本』については絶海以後も太白、江西龍派へと繼承されるのである。かくして禪林において中期以降『批點本』を重視する風潮が強まっていくのである。

四、『批點本』の流布狀況

『批點本』の註解が中國より日本禪林に傳わり、まずは絶海・太白・江西へと繼承されたが、一體どれ程の範圍に流布していったのであるうか。そのことを示す資料に、瑞溪周鳳（一三九一〜一四七三）の日記『臥雲日件錄拔尤』寶德三年十二月十七日の條が存する。

讀杜詩二十畢。寶德己巳五月八日、於鹿苑寺開講、至今凡三十三月而結局也。予三十三歲、寓相國方丈殿中席下時、西胤西堂、居于考軒講杜詩、自一至五而已。予聽此講、爾后、西胤居勝定、又講之、自十七至二十。後十餘年、就雙桂和尚、求聽此講、纒五六卷耳。蓋所未聞之卷也。中間聽嚴仲子瑜元璞講、或兩三卷、或

四五卷而止矣。諸老之義、略記所聞。

杜詩二十を讀み畢る。寶德己巳五月八日、鹿苑寺に於いて講を開き、今に至るまで凡そ三十三月にして局を結びたるなり。予三十三歲、相國方丈の殿中の席下に寓する時、西胤西堂は、考軒に居して杜詩を講じ、一より五に至るのみ。予此の講を聽く。爾后、西胤勝定に居し、又之を講じ、十七より二十に至る。後十餘年、雙桂和尚に就き、此の講を聽かんことを求むるに、纒かに五六卷のみ。蓋し未だ聞かざる所の卷なり。中間に嚴仲・子瑜・元璞の講ずるを聽くも、或いは兩三卷、或いは四五卷にして止む。諸老の義、略ぼ聞く所を記す。

寶德元年（一四四九）から杜甫の詩集を講じ始め、二十卷を讀み終わるのに、凡そ三年かかったことを述べている。當時、日本禪林に傳來し、考證に用いられた杜詩注釋書の中で二十卷本であるのは『批點本』のみである。『分類本』（二十五卷）や『草堂詩箋』（四十卷）とは考え難く、瑞溪の指す注釋書が『批點本』であることが分かる。そして瑞溪自身が受けた杜詩講義の聽講歴によれば、三十三歳の時、相國寺の殿中周噩（一三五八〜一四二八）の下、西胤俊承（一三五八〜一四二二）の杜詩講義によって卷一から卷五まで、卷十七から卷二十まで聽くことができたと言う。また雙桂和尚、つまり惟肖得嚴（一三六〇〜一四三七）に講義を求め聽いたが、それは未聽聞の僅か五、六卷であったとする。中間には、この他の禪僧に杜詩の部分的な卷を聽講したとして、嚴中・子瑜元瑾（生没年不詳）・元璞惠珙（一三七二〜一四二九）等の名を擧げている。日記では、他の條に一華建愆（生没年不詳）・天英周賢（一四〇三〜一四六三）・太白眞玄等の名を擧げ、解釋について論議したことが記されている。彼らは『批點本』をテキ

ストに用いて講述していたようであり、『批點本』が日本禪林に廣く浸透していたことが分かる。

更に中期以降の杜詩注釋書の受容について、先述のように天隱龍澤が『默雲稿』の中で「獨心華臆斷與劉氏評點、盛行于世。」(獨り『心華臆斷』と『劉氏評點』のみ、世に盛行す。)と指摘しており、『心華臆斷』と『批點本』が盛んに世に流布していたことが分かる。後期の雪嶺永瑋が抄した『杜詩抄』も、『批點本』と『續翠抄』をテキストに用いており、『批點本』を重要視する傾向は益々強まっていったことが窺える。

五、『批點本』重視の理由

初期禪林では『分類本』が主流であったのに對し、如上の過程を経、中期禪林では『批點本』が主流になったことを明らかにした。では禪僧は『批點本』のどのような點を重視していたのであろうか。

『批點本』において、何如なる點が斬新であったかについては、黒川洋一氏が既に「解題」(『集千家註批點杜工部詩集』下天理圖書館善本叢書)で論じておられる。以下、氏の指摘を参考にし、併せて禪僧の記述を検討することにする。

黒川氏は、先ず第一に「詩を讀解する上に必ずしも必要でない注や、『分門』本や『草堂詩箋』本がしばしば引用する蘇東坡の名に假託した偽注のごときものは、大膽に削り落とし、もっぱら簡明であることとを旨としている。」と指摘される。この點について江西は「贈祕書監江夏李公筮」(『續翠抄』卷十三)詩項において次のように言う。

草堂千家趙次公トハ注義理也。餘ハ注三古事機緣。而草堂惡、千家比興ナリ。趙次公分段、皆誤。唯日本七八十年翫杜詩、除

日本禪林における中國の杜詩注釋書受容

惡取善。從其善則好矣。

『草堂』と『千家』と趙次公とは義理を注するなり。餘は古事機緣を注するか。而れども『草堂』惡く、『千家』比興なり。趙次公が分けた段、皆誤れり。唯だ日本七八十年杜詩を翫び、惡を除き善を取る。其の善きに從へば則ち好し。

『分類本』や『草堂詩箋』や趙次公の注は解釋を注しているが、他は典據等を注するばかりである。『草堂詩箋』はつまらない本であり、『分類本』は不都合であり、趙次公は段分けを皆誤っていると批判する。しかし、それらが日本に傳わると、禪僧はこぞって掲載される義理や故事について考證し、初期より七八十年をかけて、正しく必要な注を取捨選擇している。そして杜詩を解釋するに際しては、その取捨選擇された注に従えば宜しいとある。この行爲は、『批點本』において從來の煩瑣な注から不必要な注を削り落とした行爲と同一である。そのため禪僧が、『批點本』の整理された注の箇所に關心を抱いたのは必然といえよう。

第二に黒川氏は、「この書物が詩話、筆記、語録の類の中から杜詩を論評するものを拾い集め、無味乾燥に陥りがちな注釋書に讀み物としての面白さと潤いを與えようとするのが擧げられる。」と指摘する。この點に關して、「寄杜位」(『續翠抄』卷十六)詩項には次のようにある。

捨批點杜詩名譽、引詩話爲重寶。集中所引詩話ヲハ可熟覽也。捨ぶるに『批點杜詩』の名譽は、詩話を引くを重寶と爲すなり。集中に引く所の詩話をば熟覽すべきなり。

ここで江西は『批點本』に詩話が引用されていることが、特徴の一つであることを指摘し、引用されている詩話を熟讀すべきであると獎勵

している。その結果として、『續翠抄』の中には、詩話の總集である『茗溪漁隱叢話』『詩人玉屑』を始め、『滄浪詩話』『西清詩話』『詩法源流』等、數多くの詩話が引用されている。他の注釋書が典據の羅列に終始するのに對し、『批點本』が詩話・筆記などを頻繁に引用することを、禪僧は十分評價して杜詩を研究していたようである。

第三に黒川氏は「杜甫が亡くなつたのは未陽ではなく、洞庭湖のあたりであつたとする説は、(中略)北宋の王得臣の『塵史』であり、なにもこの本が最初であるわけではない。しかしながら、その説を積極的に取り入れて、杜詩の編年に新し味を加えたのはこの本をもって始めとする。」と指摘する。この點について「呈勗令」(『杜詩抄』卷二十)詩項には次のようにある。

今千家集ニハ此詩絶筆也。飢以酒肉送之、甫千役ニハ牛炙白酒トアリ、醉飽之死。其後ニ水ニヲシ流サレテイツタホトニ、骨モナイ。故未陽ノ墓ハ只空墳ハカリ。甫何不道^{シテ}如此乎。故或人^ニ后三首。蓋明不醉死乎。

今『千家集』には此の詩絶筆なり。飢うるに酒肉を以て之に送り、甫千役には牛炙白酒とあり、之に醉飽して死す。其の後に水にを流されていったほどに、骨もない。故に未陽の墓は只だ空墳ばかり。甫何ぞ不道にして此の如きか。故に或いは後の三首を入る。蓋し明らかに醉死せざるか。

これまでの杜詩注釋書が本詩を杜詩の絶筆としてきたのに對し、『批點本』では本詩の後に三首の詩を設け、從來の説を否定しているとする。つまり禪僧は『批點本』が編年體であることに着目し、新たな詩の配列について理解していたため、指摘し得たと言えよう。

第四に黒川氏は「從來の杜注が事實の考證や、ことばの出典を探る

ことに終始するのに對して、この本は劉辰翁の評語を句間に散付して、杜甫の詩を詩として味わおうとする態度をもって一貫する。」と指摘し、「歲晏行」(『批點本』卷十九)における評點(日本禪林では評點のことを「批語」と呼称。以下、それに倣う。)を取り上げ、劉辰翁が杜甫の晩年の作、夔州以後の作品を高く評價していないとする。この點に關して江西は、「歲晏行」(『續翠抄』卷十九)詩項に次のように言う。

歲晏——、汝休——、第二句ヲ此テ繼テ。此批夔州以後詩ニ簡要也。山谷詩ハ、唐土ニハ打破而無也。後人本^レ其詩ニ則詩損セン故也。山谷ハ得之也。山谷斗リコソ得^レ之。其餘人學此夔州以後詩往々失之也。故失^{スル}之ヲ。

歲晏——、汝休——、第二句を此で繼だ。此れ『批』は夔州以後の詩に簡要なり。山谷詩は、唐土には打破して無きなり。後人其の詩に本づけば則ち詩損ぜん故なり。山谷は之を得るなり。山谷斗りこそ之を得たれ。其餘人は此の夔州以後の詩に學べば往々にして之を失するなり。故に之を失するとも。

劉辰翁が批語を付すのに、夔州以後の作品に對して簡單で要領を得ていとすると。後人の中で杜甫の夔州以後の作風を學び得たのは黃庭堅のみであり、他の者は學ぼうとしてしばしば失敗したとする。

そして「奉和賈至舍人早朝大明宮」(『續翠抄』卷四)詩項では次のように言う。

劉須溪愛四五卷詩也。山谷愛夔州以後詩也。又朱文公性敦厚者、故亦愛此邊城中詩也。

劉須溪は四五卷の詩を愛するなり。山谷は夔州以後の詩を愛するなり。又朱文公は性敦厚なる者にして、故に亦た此の邊城中の詩を愛

するなり。

江西は、劉須溪が『批點本』の四、五卷、つまり杜甫が朝廷に仕えてより、肅宗の怒りに觸れ、官職を捨ててまでの時期の作品を好んでいたことを指摘している。そして從來より朱子も劉辰翁と同時期の作品を好むが、黃庭堅は夔州以後の詩を好んだと記している。

同内容の記述は「孟冬」(『續翠抄』卷十) 詩項にも見られ、禪僧が劉辰翁の施す鋭い批語を深く讀解し、その杜詩に對する接し方を高く評價していたことが分かる。

以上、黒川氏が指摘するように、『批點本』には、それまでの典據ばかりを重視する注釋書とは異なり、四つの特徴が見られた。そしてそれらの點は、日本中世禪林の僧もいち早く把握し、消化していたことが判明する。

江西龍派を始めとする中期の禪僧は、『批點本』の體裁・内容を研究し、

一、不必要な注を削り落とした點、

二、詩話・筆記を引用している點、

三、編年形式を取っている點、

四、詩を詩として味わう批語が存する點、

を吟味していた。このうち第一點から第三點までは『批點本』の體裁、すなわち形式面における特徴であり、他の注釋書においても、それぞれが個有的特徴を有する。例えば禪林に流行したもう一つの『分類本』についても、一、多くの諸注を總合している點、二、黃希の訓詁註・黃鶴の作詩年代を載せている點、三、分類形式を取っている點、等の形式上の特徴を指摘することができる。現に禪僧は『批點本』の中に、『分類本』における詩の配置場所、諸注を書き入れており、『分類本』

の三點の特徴も理解していたと思われる。それにもかかわらず『批點本』を支持した理由は、やはり劉辰翁の獨自の評點、つまり「批語」にあると思われる。

六、「批語」重視の理由

日本禪僧は『批點本』を高く評價しており、中でも特に批語を重要視している。江西は「晚出左掖」(『續翠抄』卷四) 詩項に次のように言う。

江西云、凡千家注雖好、批點ニテ批語ヲ讀則好矣。不可不讀批語矣。

江西云ふ、凡そ『千家』は注好しと雖も、『批點』にて批語を讀めば則ち好し。批語を讀まざるべからず、と。

江西は『分類本』の注が勝れていることも認めているが、『批點本』の批語を讀むことが望ましく、必ず讀まなければならないとまで言い切っている。『批點本』の批語を高く評價し、最も重要視しているのである。なぜ批語を重要視するようになったのであろうか。

江西は「奉陪鄭駙馬章曲二首其一」(『續翠抄』卷四) 詩項に次のように言う。

唐人眞實相傳、義理こそ面白けれ。日本ハ何トスレトモハタケ水蓮ナリ。謂心華等也。太白傳勝定、勝定傳季潭也。

唐人は眞實に相傳の義理こそ面白けれ。日本は何とすれどもはたけ水蓮なり。心華等を謂ふなり。太白は勝定より傳へられ、勝定は季潭より傳へらる。

中國人相傳の「義理」こそが面白いとし、日本人がどんなに注を施しても畑で水泳の術(「水蓮」は水練^①)を練習するように、實際には何

の役にも立たず、空理空論に過ぎないと批判している。その中國より傳えられる「義理」の影響を受けず、空理空論が多い日本の注釋書として、『心華臆斷』を擧げている。そして自身も日本人ではあるが、杜詩解釋を傳承した太白眞玄は絶海中津から傳えられ、絶海は中國僧の季潭宗泐から傳えられたことに言及し、そこで自身は中國人より「義理」を傳えられていたとする。

ではここでいう「義理」とはどのような意味であろうか。「廣州段功曹到得楊五長史譚書功曹卻歸聊寄此詩」(『續翠抄』卷八) 詩項に次のようにある。

江西云、昔老僧ハ無點ノ本ニテ講テ辛苦ス。故舊トハヲホユル事ヲ本トス。其後古事義理ヲ學。今日ハ一向ニ義理ヲ本トス。無益矣。

江西云ふ、昔老僧は無點の本にて講じて辛苦す。故に舊とはをば(覺)ゆる事を本とす。其の後古事義理を學ぶ。今日は一向に義理を本とす。無益なり。

ここで江西は昔の杜詩講義にふれ、初め杜詩が傳わった頃は注も付されていまい本を講じるために苦勞し、専ら覺えることが中心であったことを言う。その後注釋書が傳來し、古事の典據と解釋を學ぶようになり、今日に至ると、専ら解釋を中心に學ぶようになったため、無益だと述べている。江西は日本人が手前勝手に解釋を行うようになったのを嫌っているようである。そのため前述の心華元棣の場合の解釋も低く評價されたのであろう。

これらのことから江西は「義理」を「解釋」の意味に取り、「唐人眞實相傳の解釋」を尊び、「日本僧の勝手な解釋」を嫌ったことが分かる。つまり「中國人相傳の解釋」とは、中國僧・季潭宗泐より絶海、

太白、そして自分へと傳承された『批點本』の批語に基づく杜詩解釋のことを指すのであろう。

では江西以外の禪僧は何故批語を重視していたのであろうか。そのことを示す資料に、瑞溪周鳳の記した日記『臥雲日件錄拔尤』が存する。寶徳二年(一四五〇)四月五日の條に次のようにある。

天英曰、某曾讀杜詩、批語有蹙千里之語。林曰、此蓋出於毛詩中、偶不記何篇云々。後檢毛詩、則在小辨篇中。又某見雙桂和尚杜詩本、捲簾殘月影、高枕遠江聲之下批、有黨合二字、改黨作儻。後告之雲林。林曰、黨合二字、雖未知出處、而作黨而合之義乎。雙桂改作儻、未爲可也云々。

天英曰く、某曾て杜詩を讀み、『批語』に『蹙千里』の語有り。林曰く、「此れ蓋し毛詩中に出づるも、偶々何篇なるかを記さず云々」と。後に毛詩を検するに、則ち「小辨」の篇中に在り。又た某雙桂和尚の杜詩本を見て、「簾を捲く、殘月の影、高枕、遠江の聲あり」の下の『批』に、「黨合」の二字有り、黨を改めて儻と作す。後に之を雲林に告ぐ。林曰く、「黨合」の二字は、未だ出處を知らずと雖も、而れども黨を作して合するの義なるか。雙桂改めて儻と作すも、未だ可と爲さざるなり云々」と。

天英周賢は、『批點本』の「有感」(『批點本』卷十) 詩の「雨臺舊拓邊」(雨臺舊邊を拓く)に付けられた批語「此五字、有蹙百里之悲。」(此の五字、蹙百里の悲有り。)の「蹙百里」(天英は誤って「蹙千里」とする)という語句の典據が、毛詩の「召旻」(天英は誤って「小辨」とする)にあることを指摘する。「召旻」には「日辟國百里、今也日蹙國百里。」(日々國を辟くこと百里、今や日々國を蹙むること百里。)とあり、ここで召公は、かつて隆盛であったのに、今や日々百里も國

が狭くなっているのを悲しんでいる。杜甫の詩においても、唐の全盛が安祿山の亂によって衰退している様子を詠じており、劉辰翁はその杜甫の悲しみに『毛詩』『召旻』の召公の悲しみを當てはめたのであろう。また天英が「雙桂和尙」、つまり惟肖得巖の『批點本』を拜見したところ、「客夜」(卷九)詩の批語に「凡言動中靜、靜中動。意皆謬見。黨合境趣、自無不有耳。」(凡そ動中の靜、靜中の動を言ふ。意は皆な謬見なり。境趣を黨合し、自ら有らざる無きのみ。)とある「黨合」の二文字を、「儻合」の二文字の間違ひではないかと改めていたことも傳えている。それに對し、雲林は、「黨合」について境趣を組み合わせると解しており、惟肖が「儻合」と改めたことに對して、妥當とは言えないとしている。

寶徳三年(一四五二)四月十六日の條にも次のようにある。

又曰、杜詩所謂首路栗亭之句、元璞與西胤論之、西胤訓首字作始。然元璞義以訓向、訓赴、爲勝也。又曰、杜詩批語、有駘蕩二字。蓋逸遊無度也。予曰、此註必在文選。

又た曰く、「杜詩の所謂『首路栗亭』の句に、元璞は西胤と之を論じ、西胤首の字を訓じて始めと作す。然れども元璞の義は以て向かふと訓じ、赴くと訓じ、勝と爲すなり。」と。又た曰く、「杜詩の批語に、『駘蕩』の二字有り。蓋し逸遊度無きなり。」と。予曰く、「此の註は必ず『文選』に在り。」と。

ここでは「木皮嶺」(『批點本』卷六)詩に出てくる句「首路栗亭の西」の「首」の字の意味について、かつて西胤俊承は「始め」と訓じ、元璞惠珠は「向かう、赴く」と訓じたのを比較し、元璞の方を採用している。そして「江畔獨步尋花七絕句其六」(『批點本』卷七)詩の句「自在嬌鶯恰怡啼」(自在の嬌鶯は恰怡として啼く)に付された批語

「駘蕩稱情。」(駘蕩情に稱ふ。)の「駘蕩」の出典が、謝朓の「直中書省」(『文選』卷三十所收)詩の句「春物方駘蕩」(春物方に駘蕩たり)であることを指摘している。

以上の二列はいずれも、劉辰翁の批語の典拠を詳しく考究し、批語をより深く味わおうとしている。『批點本』では、従来の典拠中心の注と異なり、劉辰翁が独自の觀點から杜詩を評釋し論じている。當時の多くの禪僧は、中國禪僧から相傳された讀解法に代わり、『批點本』の批語に含まれる劉辰翁の杜詩讀解法を重視していたようである。批語において、中國文人が杜詩を何如に解釋し、何如に接していたかについて關心を抱いていたようである。

このように當時は、日常の會話の中で杜詩が話題となり、しかもその際に用いられているテキストが『批點本』であったことが分かる。

そして『批點本』の杜詩註解を研究する上で、先ず重要視されたのが劉辰翁の批語であり、禪僧はその典拠や字句の異同まで考證している。批語を重視した理由には、江西龍派が批語に基づく「中國人相傳の解釋」を重んじたことが挙げられ、さらに、相傳をそれ程に意識しない禪僧も、劉辰翁に代表される中國人の杜詩讀解法が批語に含まれていることを評價したことが挙げられよう。

七、「批語」の特徴

では禪僧達は、劉辰翁の批語に對して具體的にどのような特徴を認めていたのであろうか。以下、顯著な例を掲げる。「倦夜」(『批點本』卷十一)で劉辰翁は、總括して「暗飛螢自照、水宿鳥相呼、以爲賦景則淺、以爲興比則長。作者於景、未有不兼也。」(暗に飛びて螢自ら照らし、水に宿りて鳥相呼ぶは、以て賦景と爲せば則ち淺く、以て興比

と爲せば則ち長し。作者の景に於けるや、未だ兼ねざること有らざるなり。)と批語を付し、これに對して『續翠抄』で江西は次のように言う。

批ニ如此。批ヲハ能覺ヘシ。可爲支證也。

『批』に此の如し。批をば能く覺ゆべし。支證と爲すべきなり。

ここで劉辰翁は「倦夜」詩が、景色の描寫と共に、比興を込めていてと評している。江西はその批語をよく覺えておき、支證とすべきであると説く。批語を熟讀し、それを覺えることで、中國人の詩句の解釋法が會得できると考えていたのである。

そのことを示すのに「諸葛廟」(『批点本』卷十七)の批語に對して江西は次のように言う。

解詩宜參得句、有批點可見之。

詩を解するは宜しく參じて句を得るべくして、批點有らば之を見るべし。

江西は杜詩を解釋する上で、最も大事なことは詩句を深く吟味することであり、批語があればそれを見るべきであるとしている。江西が批語をどれ程重要視していたかが分かる。

「鹿」(『批点本』卷十六)詩において、劉辰翁は首聯「永與清溪別、蒙將玉饌俱。」(永く清溪と別れ、玉饌と俱にするを蒙る。)に「十字無限傾盡。」(十字にして無限に傾盡す。)と評し、頷聯「無才逐仙隱、不敢恨庖厨。」(才の仙隱を逐ふ無し、敢へて庖厨を恨まず。)に「又是一意。」(又た是れ一意なり)と評し、頸聯「亂世輕全物、微聲及禍樞。」(亂世 全物を輕んず、微聲 禍樞に及ぶ。)に「又一意。」(又た一意なり。)と評し、尾聯「衣冠兼盜賊、饜餐用斯須。」(衣冠と盜賊と、饜餐 用ふること斯須なり。)に「又一意。」(又た一意なり。)と

評している。それに對し、江西は次のように言う。

又一意三度云面白。一番ハトニカウニ見レトモ鹿カ殺サレウス。

道理テコソアルラウメ。二番ハ非亂世、則全生事モアラウスカ。

亂世之故是又殺レウス理也。三番——無不道時代ナラハアラウスカ。今衣冠、不道ホトニ殺ルル也。十字——傾盡トヤウニ見トモ、

殺ス之由多也。批語ホト面白者ハ無也。

「又一意」と三度云ふは面白し。一番はとにかうに見れども鹿が殺

されうず。道理でこそあるらうめ。二番は亂世に非ざれば、則ち生を全うする事もあらうずか。亂世の故に是れも又た殺されうず理なり。三番は——無不道の時代ならばあらうずか。今は衣冠なれども、

不道ほどに殺されるなり。「十字——傾盡」とやうに見れども、殺

すの由多きなり。批語ほど面白き者は無きなり。

劉辰翁は、杜甫が首聯の十字で全てを言い盡くしているとし、後の三つの聯でそれぞれ鹿を殺す理由をあげているとしている。それを讀んだ江西は、最初に十字に言い盡くしているとしながら、鹿を殺す理由を三つも追及している劉辰翁の獨特の批語ほど興趣の存するものはないと絶贊している。批語に劉辰翁の鋭い感性・解釋を認めているのである。

そして「猿」(『批点本』卷十六)詩の批語について江西は次のように言う。

猿、批點ヲ能見ハ、詩ヲハ可作。

猿、批點を能く見るは、詩をば作すべし。

『批点本』の「猿」詩には、詩句「慣習元從衆」(慣習 元衆に従ふ)に對して、「五字似率然、亦有見後又云猿挂時相學、乃工。」(五字は率然たるに似たれども、亦た後に又た「猿挂りて時に相學ぶ」と云ふ

を見る有らば、乃ち工なり。」と批語が付されている。これは杜甫が、猿は習慣で多くの猿に従う、というのに對し、一見杜甫の思いつきの發言であるかに見えるが、後に「瀟西寒望」詩に「猿挂時相學」（猿挂りて時に相學ぶ）ともあるのを見れば、大略同意であり、實に巧妙であると指摘している。このように禪僧は、批語に「工」に詩を製する秘訣が、杜詩に對する評を通じて述べられていと解している。禪僧は杜詩とその批語を讀み、「工」となるための要領を學び、自身の詩に活かそうとしたと思われる。中期頃、詩禪一致の思想が唱えられ始め、詩が盛んに作られ、何如に詩を作るべきかということが、禪僧にとつて最大の關心事となる。そのため作詩における注意すべき事項が多分に含まれている批語が重視されたのであろう。

以上のように、江西は劉辰翁の批語を『分類本』の諸注よりも高く評價し、覚えておくべきであると言いつ切り、批語ほど面白いものはないと稱贊している。劉辰翁の豊富な知識を基にした、鋭い觀察眼から生み出される感懷・解釋を絶贊しているのである。その批語を讀むことが杜詩讀解上で最も有益であり、また自身が詩を製する上でも有益なのである。中國より相承された『批點本』は、如上の批語の特性が尊重された結果、禪林に確固たる地位を築いたのである。

八、まとめ

從來、禪林社會に流布していた杜詩注釋書は、『批點本』であるとされていた。しかし、實際には初期においては『分類本』が主流であり、中期、後期と時代が移るにつれ、『批點本』が主流になっていくのである。その背景を考査してみると、中國禪林との學術交流に原因が存することが明らかになった。中國において『批點本』が出現した

日本禪林における中國の杜詩注釋書受容

當初、季潭宗泐や清遠懷涓はそれを支持したが、用章廷俊や用堂子樞は從來の『分類本』を支持し、二書を支持する禪僧が入り交じって存在することになった。そのため、日本から入明した大年祥登や伯英徳俊は用章や用堂より『分類本』の註解を學び、絶海中津や如心中恕は季潭や清遠より『批點本』の註解を學んで歸國したのである。

日本禪林においては、歸國した僧がそれぞれ支持した注釋書を用いて講述したため、『批點本』の註解を學習する禪僧と『分類本』を學習する禪僧が出現することになる。以後、『分類本』を支持する禪僧が見られなくなるのに對し、『批點本』はそれ自體が持つ斬新な特徴に加え、絶海が講じる『批點本』による註解の影響力が強く、しかも中國禪僧の直傳の解釋をも傳えていたため、太白眞玄や江西龍派が率先してそれを繼承した。また『批點本』の批語自體には劉辰翁自身の杜詩讀解法が示されており、太白や江西の講述と共に、多くの僧が批語に關心を抱き、重視するようになった。こうして『批點本』は批語の特性を特に高く評價され、以後も重視され続け、後期禪林では盛んに流布したのである。

日本禪林では、時期によって重視する注釋書が異なるという現象を呈したが、それは常に中國を意識し、最先端の漢文教養を身につけようとした禪僧の意欲がもたらした結果と言えよう。

注

- (1) 芳賀幸四郎『中世禪林の學問および文學に關する研究』（日本學術振興會 昭和三十一年）・黒川洋一『日本における杜詩』（『杜甫の研究』所収・創文社・昭和五十二年）
- (2) 高見三郎『杜詩の抄——杜詩續纂抄と杜詩抄——』（『山邊道』第二一

號所收

- (3) (13) (14) 前掲芳賀氏論文に見られる。筆者は『默雲稿』の資料については未見。
- (4) 「禪林における杜詩注釋書受容について——初期の場合——」(『中國學研究論集』第九號・二〇〇二年十月)
- (5) 現在では「日上人茅齋」が一般的である。
- (6) 王學泰「杜甫詩集『黃鶴補注』評」(『文學遺產』一九八三年三期所收)に詳しい。
- (7) 黒川洋一『集千家注批點杜工部詩集』下「解題」(天理圖書館漢籍善本叢書・八木書店)に詳しい。
- (8) 周采泉『杜集書錄』(上海古籍出版社)によれば、編成された年が竇元二年、刊刻された年が嘉祐四年とある。
- (9) (10) (11) 玉村竹二『五山禪僧傳記集成』(講談社・昭和五十八年)による。
- (12) 拙稿「杜詩注釋書『心華臆斷』について——日本禪林における杜詩解釋の様相——」(『日本中國學會報』第五十四集所收)
- (15) 前掲(2) 高見氏論文。嵯峨寛「第一冊札記」(『杜詩抄解題』一・光風社書店)等に指摘されている。
- (16) 「水(睡)蓮」は沼地に生育するものであり、「畑に水(睡)蓮」で場違いの意味に取れそうであるが、ここでは『日本國語大辭典』(小學館)の「はたけで水練を習う」項の説明に據った。